

図書室月報

2022年(令和4年)3月5日

第706号

〈図書室のつどい 参加者の感想〉

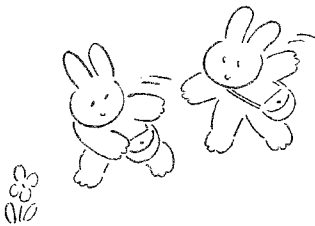
ゆっくり、いそげ~カフェからはじめる人を手段化しない経済~



『健全な負債感』

—私が感想文を書く理由—

岩崎 友哉



講座が幕を閉じ、著書を購入して満足げに会場を後にしようとした時のことだった。「あ、すいません！すいません、あのこの度はご参加ありがとうございました。全然強制というわけではないんですけども、大変楽しんでいただけただけようですし、もしよかったですら感想を書いてもらえませんか？」

今回の「図書室のつどい」にも参加していなかったら、こんな依頼を受けた時どうしていたであろうか。おそらく、「感想書くメリット全くない？面倒臭いし時間取られるよなあ。授業も課題もあるし。よし、断ろう。」あーごめんさい、今忙しくて、申し訳ないです。」とでも言っていたであろう。

しかし実際の私は「はい！僕でよければ喜んで書かせていただきます！素敵な機会をありがとうございました。」と快諾し今こうして感想文を書いている。これには私自身も驚きである。

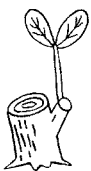
影山知明さんは講座の中で「健全な負債感」という馴染みのない言葉を口にされていた。ここでいう「負債感」とは『相手との関係の中で「受けているものの方が多いな」「返さなきゃ」という気持ちを背負うこと』であると影山さんは言う。そしてそれは「必ずしも義務感ということでもなく、本当にいいものを受け取ったとき、感謝の気持ちとともに人の中に自然と芽生える前向きな返札の感情」でもあるらしい。影山さん曰く、人はこの「健全な負債感」を感じた時に、最小費用で最大効用を得ようとする「消費者的人格」から、自己の利益の多寡に関係なくお返ししようとする

「受贈者的人格」に移行する。おそらく私もまた、「無料で講演会に参加して多くのことを吸収してやる」という当初の消費者的人格が、影山さんの熱心で心のこもったご講演を拝聴したことで、「これ無料で聞いてしまったいいのか？！申し訳ないなあ。」と健全な負債感を感じ、受贈者的人格へといつの間にか移行していたのだろう。影山さんが講演を行い(give)、私が拝聴し(given)、(個人的にメリットは無くても)誰かに向けて感想を執筆する(give)という連鎖反応が起きているに違いない。そこには決してtake-takenに基づく他者を(利用し合う)関係は存在せず、give-givenに基づく他者を(支援し合う)関係が存在しているはずだ。

私は現在一橋大学の経済学部にも所属し経済学を学んでいる。普段の授業で教えられるのは「消費者的人格」を持った個人が、いかに効用を最大化するかということであるが、そうした経済学に直などころ興味も愛着も持てず悶々としていた。

そんな中、本講座を拝聴したことで、影山さんが提唱する「人を手段化しない経済」言い換えれば「植物が育つように、いのちの形をした経済」を私は今後の社会において実現したいのだと確信した。

講座が開かれたのは10月10日。偶然にも私の21歳の誕生日であった。21歳1日目に将来への道しるべとなる思想に出会えて大変嬉しく思う。拙いが想いのこもったこの感想文(give)が、誰かに受け止められ(given)、また別の誰かへの贈与(give)に繋がることを願い筆を置く。



ブッククラブから

松本清張著

『或る「小倉日記」伝』

—清張の膨大な社会探求作品群の原点となる—

〈受賞に至る経緯〉

『或る「小倉日記」伝』は、「三田文学」1952年9月号に掲載された。同誌編集員の推理作家木々高太郎が書かせた作品である。1月直木賞候補作品となったが、選考委員の永井龍男が、芥川賞向きと芥川賞選考委員会に回付し、昭和27年度下期の第28回芥川賞と決定した。作者44歳の時である。一緒に受賞した作品は、五味康祐の『喪神』である。

受賞にいたる経緯が示しているように、純文学と大衆文学、その中間の推理小説を併せ持つ作品で、その後の膨大な作品群を生み出す性格の萌芽をすでもつていた。芥川賞受賞後に「文藝春秋」掲載にあたって、変名だった登場人物が実名になるなど全面改稿された。

〈受賞時の感想〉

清張は受賞時の感想として次のようにのべている。「芥川賞をもらうには運不運があるといわれている。『西郷札』入選に続く受賞で、自分の幸運に愕いている。若い時からの文学志望者でない自分には、文学修練の苦勞の時代がなかった。今、芥川賞をもらったのは、大変だと思った。修練の足らなさは基盤の脆さを思い知らされているのだ。もう三四年は、埋もれて苦闘したかった。この受賞が、自分の出発の推進となるか、背負わされた重荷となるかは、これからの運命と同様分らない」

しかし、その後1958年に『点と線』『目の壁』がベストセラーとなり、『社会派推理小説』ブームの原動力となり、1992年82歳でなくなるまでの作家生活40年で約980作品を残した。作家高額納税者として司馬遼太郎と長期にわたって名を連ねた。

〈坂口安吾の選〉

坂口安吾の選評が、その後の作者の発展性を暗示している。「文章甚だ老練、また正確で、静かでもある。一見平板の如くでありながら造形力逞しく底に奔放達意の自在さを秘めた文章力であって、小倉日記の追跡だからこのように静寂で感傷的だけれども、この文章は殺人犯人をも追跡しうる自在な力があり、その時はまたこれと趣きが変わりながらも同じように達意巧者に行き届いた仕上げのできる作者であると思った。」

〈作品のあらすじ〉

大男で、しょうがいを持つ田上耕作が主人公。森鷗外が小倉に在住した明治32年から3年間の間の所在不明の日記を巡る調査の話。ふとしたことで、友人から、鷗外の小説を紹介され、幼児の時、鈴の音にからんだ伝使の記憶が蘇り、探求する動機につながった。「鷗外の枯淡な文章は耕作の孤独な心に応えるものがあつたのであろう」

「耕作が自分の身体に絶望してどのように煩悶しているかは、他人には分からないのだ。(中略)今にみる、と

大井利雄

いう気持もそこから出た。それが、たった一つの救いであつた。」

耕作が、いわゆる足で歩いて資料を集め、鷗外の「小倉生活」を記録して失われた日記を探すことに全身を打ち込むことになる。

東某の「そんなことを調べて何になりますか？」 実際こんなことに意義があるのか、空しいことに自分だけが気負っていたのではないかと反問しながらも、なんとか成功させたいという母ふじと一緒に、伝手を求めて調査に明け暮れる。僅かな家作も失い貧困の中病に倒れる。耕作の死後、鷗外の『小倉日記』が発見された。耕作が、この事実を知らずに死んだのは、不幸か幸福か分からない。

〈感想〉

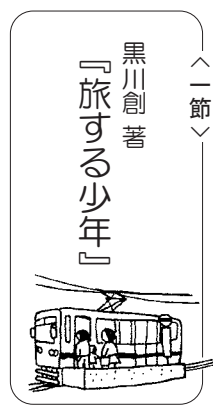
伏線も構成力もしっかりとした、根気強い調査の過程と内容を示した短編である。鷗外を取り巻く無名の人たちの活写も興味深い。

鈴の音にからむ幼時の記憶と亡くなる時の情景は、耕作の生き方の象徴。友人、知人らの好意を受けながら、母と一体となった調査は、生きて何をするかが貴重だと問いかける。清張は「人間の努力というものがむなし作業だと感じて、本小説を書く気になった」と語るが、耕作は清張の影の姿なのだろう。



新着図書から

〈哲学 心理学 宗教〉 14 歳からの個人主義	丸山俊一 (大和書房)	151	宮田登 民俗的歴史論へ向けて 宮田登 (アーツアンドクラフツ)	380
〈歴史〉 ビルマ危機の本質	タンミンウー (河出書房新社)	223	沖繩からアジアが見える 山に生きる	382
東京近郊ゆるる登山	西野淑子 (実業之日本社)	291	〈自然科学〉 WHY TIME FLIES	384
〈社会科学〉 歩く・知る・対話する琉球学	(松島泰勝・編著)	302	アラン・バーディック (東洋館出版社)	421
コロナ後の世界	内田樹 (文藝春秋)	304	虹のむこうには 14 歳から考えたい優生学 フィリップ・レヴィン (すばる舎)	498
ウイグル大虐殺からの生還 再教育収容所地獄の 2 年間	グルバハール・ハイテイワジ (河出書房新社)	316	〈工業〉 沖繩島料理	498
黒人と白人の世界史	オレリア・ミシエル (明石書店)	316	岡本尚文・監修 (トウワヴァージンズ)	594
ワーク・ファミリー・バランス	高橋美恵子・編 (慶應義塾大学出版会)	366	ユリの文化誌 「木」から辿る人類史 ローランド・エノス (NHK出版)	627
性差 (ジェンダー) の日本史	国立歴史民俗博物館・監修 (集英社インターナショナル)	367	〈芸術〉 それでも映画は「格差」を描く	657
女性の生きづらさとジェンダー	心理学研究会ジェンダー部会・編 (有斐閣)	367	町山智浩 (集英社インターナショナル)	778
声をあげて、世界を変えよう!	アドーラ・スヴィタク (DU BOOKS)	367	〈文学〉 ぜんぶ愛。	91あ
#MeToo の政治学	鄭喜鎮・編 (大月書店)	367	しくじり家族	91い
女性たちで子を産み育てるといふこと	牟田和恵 (白澤社)	367	島を出る	91う
ヤクザ・チルドレン	石井光太 (大洋図書)	368	旅する少年	91く
わたしは黙らない	合同出版編集部・編 (合同出版)	368	ここに物語が	91な
わたしたちの「生活保護」	石黒好美・編著 (著風媒社)	369	夜が明ける	91に
故郷は帰るところにあらざりき	小島力 (西田書店)	369	父のピスコ	91ひ
ヤングでは終わらないヤングケアラー	仲田海人・編著 (クリエイツかもがわ)	371	星を掬う	91ま
ネットいじめの現在 (いま)	原清治・編著 (ミネルヴァ書房)	371	途上の旅	91わ
			ご機嫌剛爺	91お
			星新一の思想	91ほ
			漢文ノート	92さ
			味の台湾	92じ



〈一節〉

黒川創 著
『旅する少年』

この一九七三年八月には、東京・荻窪の母方の祖父母宅に滞在しながら、一人で、青梅線ぞいに、終点の奥多摩駅まで歩いている。羽村駅、青梅駅、二俣尾駅、奥多摩駅……と、記念に買収求めた入場券が残っている。駅窓口で売られる硬券では、子ども運賃の場合、切符の右側をハサミで斜めに断ち落とす。子ども料金の入場券は、当時一〇円である。

また、もう現物は私の手元にも残っていないのだが、作文「やりたい事」でも書いているように、当時は国鉄の「ディスプレイ・ジャパン」観光キャンペーンの最盛期で、少年の私も、まんまとはまって熱心に駅の記念スタンプを集めていた。駅のキオスクで「スタンポート」を買って、そこに押しつけていくのだが、何冊も、これがたまっていく。青梅線ぞいを歩いたのは、お盆にかかる八月一三日のことだった。天気もよく、御岳駅で溪流をなす多摩川のほうに降り、白っぽい大岩に座って、祖母が作ってくれたおむすびを一人で頬張ったことを覚えている。(春陽堂書店)



図書室のしごと

高校教師、住まいを捨てる

お話 よしかわけいすけ

(会社員、ミニマリスト)

大学卒業後、地元の石川県金沢市の高校で常勤の英語教師をしていたよしかわさんは、約4年間で車やテレビ、冷蔵庫、洗濯機、500冊以上の蔵書など99%以上の所有物を手放しました。その後、住んでいたアパートを引き払い、「ゲストハウス」と呼ばれる旅人向けの簡易宿泊施設に滞在しながら、午前中は高校の非常勤講師、午後はベンチャー企業の社員として「複業」生活を送っていました。

現在は拠点を東京に移されているよしかわさんに、最小限の物で暮らす生き方や、物や住まいを手放したからこそ学べたことなどをお話いただきます。大量生産・大量消費の在り方を見つめ直し、少ない物で心豊かに生きる考え方を学ぶ機会にしたいと思います。

※「ミニマリスト」とは自分に必要な最小限の物だけで暮らす人を指し、「最小限の」という意味の「ミニマル」から派生した造語です。

よしかわさんの本 表題作 (河出書房新社)

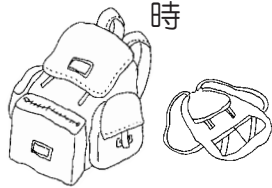
とき 4月2日(土) 昼2時〜4時

ところ 公民館 地下ホール

定員 40名(申込先着順)

申込 3月9日(水)朝9時〜

公民館 ☎(572)5141



〈私の本棚から 第6回〉

有川浩著

『植物図鑑』



中井あつし



「私の本棚から」私の担当は今月が最後です。私は毎年この時期になるとこの本を読み、春の訪れを感じて、野山に散歩に行きたくなるのです(花粉症ですが)。

タイトルは『植物図鑑』ですが、いわゆる図鑑ではなく、『植物図鑑』というラブコメ小説です。

この本は『天空の城ラピュタ』の逆バージョンです。「女の子の前にイケメンが落ちてきて何が悪い!」という発想で書かれています。

二月中旬週末の深夜の寒空の下、残業続きの二十代のさやかかかの一住まいのアパートの前に、「白馬に乗った王子様登場」ではなく、行き倒れになった凍死寸前のイケメンが「落ちて」いました。彼の名はイツキ。

「行き倒れてます。お嬢さん、よかつたら僕を拾ってくれませんか? 咬みません。躰のできたよい子です」と言っ、イツキはさやかかかの膝に丸めた手を載せます。

呑み会帰りで、かなり酔っていたさやかかかは捨て犬でも拾うように、見ず知らずのイツキを部屋にあげ、カップラーメンを食べさせ、一泊させてやります。

翌朝、さやかかか目を覚ますと、食卓に美味しそう

な朝ごはんの支度ができていました。そう、この野良犬のイケメン君は料理が得意だったのです。胃袋をがっちり掴まれたさやかかかはこのあと、イツキを家政夫として同居生活を始めます。週末ごとに二人で散歩に出て、野草や山菜の「狩り」をして、料理をして食べるという充実した食事の描写はワクワクします。

若い男女が同居しているので、やがてお約束の恋愛に発展していき、有川さんお得意のキュンキユンする文体のラブコメが展開していきます。ぜひ、この小説を読んで、「キュン死に」感を味わってください。

この本を読むと、郊外の野山や河川敷に行くと野草や山菜を摘みたくなってしまうと思いますが、中には毒を持った物がありますので、自分で間違わない自信のあるもの以外は絶対に手を出さないようにしてください。また、採集に当たっては、私有地には立ち入らないこと、農薬や除草剤が散布されているような場所での採集も避けてください。(角川書店。文庫本もありますが、野山草の写真が大きく、図鑑風な装丁も楽しめる単行本がおススメです。)

係から

中井さんの「私の本棚から」は今回が最終回になります。どれも手に取って読みたくなる魅力的な紹介をしていただきました。本当にありがとうございます。

